

語彙 (理論・現代)

西尾寅弥

語彙の構成要素である単語ないし語彙素は広くとれば数十万にも及ぶので、語彙の全体像を具体的に直観することは人間わざでは考えられないほどのことである。そこで語彙の研究では、統計学的方法を使って数量的に把握しようとしたり、使用頻度や使用範囲の大きい語を選んだりする。また、何かの方法で語彙の基本的な層をみつければこれに依存するとみることにより語彙の全体的な認識への道をひらこうとする。あるいは、語彙の部分的な体系のくわしい分析をつみあげていって全体的な体系へ迫ろうとする。あるいは、あるインフォーマントの語彙をまず徹底的にしらべあげて個人語の体系を具体的にとらえようとする。非常に大まかにみて、たとえば右のような方法が、語彙を体系としてとらえようとする研究においてとられているとみられる。この二年間についても、研究の基本的な路線はおおよそ変わりもなく、いろいろな方向での研究が積み上げられているという全体的印象を筆者はもっている。

しいて新しい動きかと思われる点を一つあげるなら、この期にはじまったとは言えまいが、語彙を言語外の世界との密接な関係において研究する方向が一層明確化されてきたことである。もちろん語彙はことばの中だけで自足する世界ではなく、事物や経験の世界を

屈折しながら反映しているとみられるので、風土・文化・国民性などのかかわりは常におのずと意識されやすかった。しかし、語彙の研究が独自の研究領域であることを自覚しようとする段階では、語彙も独自の体系であることに重点がおかれやすかった。語彙論の主体性が確認できた次の段階では、ものごとの世界をはつきりとみすえ、それとのかかわりにおいて語彙をより深くとらえようとするのは、研究の自然な発展方向であろう。もともと地域の社会や生活との結びつきつよい方言研究のほうで、近年、語彙の体系的記述がさかんになっていることなどにそれがうかがわれるのではなからうか。また、六節にあげた上村氏の論文に右の傾向がはつきり出ていると思う。

二年間の研究を便宜的に以下の諸節のような方面に分ち、筆者の理解する研究情況の文脈の中に位置づけることを試みたい。ただし、理解しうる領域の狭さから、羅列的にならざるをえない所も多くなったことは残念に思っている。(敬称は省略させていただきます)

一、語の意味

意味論上の基本的な問題についての考察として、大鹿薫久「語の

多義性について——動詞「つく」を例として——(大阪大『語文』36、昭54・6)がある。語の多義性の識別についての諸家の考えを検討してから、E・A・ナイダの「ある語の意味が多岐になるのは、その語の意味がいろいろ違った分野に用いられるからである。」という考えに立ち、「つく」を例としてこれを検討している。「つく」は大きくはおよそ「主体の移動」「主体の相手との接触」「主体の発火・発光」の三つの意味分野に用いられているが、こまかくみれば意味分野はさまざまに設定されることが多く、さまざまに切り取ってみることによって多面的に記述するよりしかたがなかなうとしている。語の意味の異同、多義性は意味の本質に深くかかわり、意味記述にも回避できない問題である。基本動詞「つく」の分析から、多義性というものが固定的なものではないということ述べている。

語の意味の具体的な分析の成果としては、柴田武編『ことばの意味2辞書に書いてないこと』(平凡社選書66、昭54・6)が出て、第一巻につづいてこういう仕事の内容を広く世に知らせることになった。

第一巻と同じく約三十組の基礎的な動詞の意義素分析である。第一巻のメンバーである柴田氏と国広哲弥・長嶋善郎・山田進の四氏に浅野百合子氏が加わった共同研究の成果で、「タス・クワエル」の項についての討論の速記録の一部も収められている。

動詞の意味の研究には、北邨香代子・中山晶子・村田知子・中道真木男「発話行動を表わす動詞の意味分析」『日本語教育』34、昭53・2)もある。東京外国語大学日本語学科の大学院生の自主ゼミナールの成果である。「イウ、ハナス、ノベル、シャベル、カタル」の意義素分析が行なわれている。

東京都立大学国語研究室から創刊された『日本語研究』も、第一

号(昭53・3、すでに品切れの由)第二号(昭54・7)は「類義語の意味論的研究」を特集している。指導教官である中本正智氏の「語彙の意味論的研究序説」(第1号)「移動に関する動詞語彙」(第2号)があり、両号とも「さわる・ふれる・接する・接触する」「しる・わかる」「スタートする・出発する・はじまる」のような動詞の類義語を分析した十数氏のレポートを収めている。ほかに「意味的に関連する動詞語彙目録——語引き意味論関係目録——」(第2号)という新しい試みの索引もある。今後もしきつづき発展することを望みたい。

右にみてきた語意味の研究は、品詞的にみればいずれも動詞に関するものであった。それ以外の語類を対象としたものに、国広哲弥「時間接統表現の意味——意義素の分析——」『国語と国文学』55—5、昭53・5)がある。「ウチニ・マエニ・アイダニ」「ト・トキニ」について、浅野百合子・久野暉の研究を検討しつつ意義素を設定している。

語の意味分析を、小中学校における語の指導法の研究の中に生かそうとする共同研究として、甲斐陸朗氏を中心とする愛知県学習基本語彙研究会による『学習基本語彙の研究 第一集』(昭54・4)もある。

類義語の意味記述と結合価文法を積極的に結合する研究として、仁田義雄「類義語へ取り返す√とへ取り戻す√の文法——Lexico-Syntaxの観点から」『計量国語学』11—4、昭53・3)がある。標題の二つの動詞を取り上げて、意味論と構文論を結合する方法の有効性を論じている。「取り戻す」は、「取り返す」と同様に「お金、本、権利、地位……」を対象にするほかに、「取り返す」と違

って意識、健康、彼ららしさ……」をも対象とする。「お金、権利……」は「主体から分離可能」、「意識、彼ららしさ……」は「主体から分離不可能」の特性をもつ名詞である。この区別から、両動詞について明示的な記述が得られ、また同じ区別が他の動詞にもいろいろ適用できるとしている。

形容詞を中心とする、語彙・文法的な精細な研究に、まづもと・ひろたけ「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ——連語の記述とその周辺」(言語学研究会編『言語の研究』、昭54・10)がある。形容詞の格支配は動詞にくらべると変化にとほしく、主格以外ではニ格が比較的多いようである。この問題を中心として、約九百の用例を引用しつつ、「対象的なむすびつき」「規定的なむすびつき」「状況的なむすびつき」の大別のもとに詳しい記述を行なった労作である。

語の意味的分析において、多くのばあいその中心をなす指示的・事実的な側面がおもに取り上げられるのは当然なことであろう。ただし、周辺の暗示的な側面も無視できない場合があり、評価的な側面などもその一類と考えられる。西尾寅弥「語意味における評価的な側面についての小調査」(群馬大『語学と文学』19、昭53・7)はたとえば「うまい方法」と「巧妙な方法」に対する評価面の感じ方の違いを比べるような、文字通りの小調査である。

この節に述べたような情況をみると、柴田氏を中心とするものほかに、あるいはそれからの刺激もあって、いくつも意味についての共同研究がめばえてきていることが注目される。

二、語構成・慣用語

語構成論の方面では、現代語の語構成の全般的な記述にかかわる

ものとして、宮地裕「現代語の語構成」(『国語と国文学』56—1、昭54・1)がある。同氏の「現代漢語の語基について」(『語文』31、昭38・7)「現代洋語の構成」(『国語国文』513、昭52・5)に続いて、現代日本語の和語を中心に考察している。語例は国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』の高頻度語をとり、自立モーフ(単一語基・複合語基)、結合モーフ(単一語基、接辞、助辞)を、体言系・相言系・用言系・副言系などに分けて示している。そして、語種間での語構成上の性質を比較するなど、大局的な把握を行っている。

宮地氏の研究と対照的に、少数例をくわしく考察したものとして、斎藤倫明「形態素『深』『浅』とその合成語」(『国語学研究』19、昭54・12)がある。標題の二つの形態素とそれを中心とする派生語・複合語を取り上げて形態論的分析を行い、さらに意味論的にくわしく考察している。形態素のレベルにおいても多義性がありうることを主張し、右の二つの形態素にそれぞれ数種の意味を認め、諸意味間の関係づけなどを行っている。

複合語を品詞別にみると複合名詞がいちばん多いが、複合名詞の内部の組立てをみると、名詞どうしの結合したものがいちばん多い。そして、成分としての名詞どうしの関係は複雑多岐にわたっているようにみえる。こういう問題を対象とした研究として、湯本昭南「あわせ名詞の構造—— $n+n$ のタイプの和語名詞のばあい——」(『言語学研究会編『言語の研究』、昭54・10)がある。「特徴づけのむすびつき」がもっとも多く、かつ基本的であり、「ものとその状態のむすびつき」「部分、側面のとりだしのむすびつき」とともに大きくは三つのタイプに分けられている。複合名詞の全体の意味が、要

素の意味の単純な和ではないこと、自由な連語形式の意味に比べて特殊化を受けていることが強調されている。豊富な語例があげられていて有益であるが、どういう範囲から語例を採集され、また右のタイプでカバーできないものももしあれば、どんなものがどのくらいあるか、などの点も示していただけたらと思われる。それもまた、割り切りにくい、示しにくいことであろうけれども。

複合語のうちの複合動詞については、二つの動詞が結びついて複合動詞化する語形成様式が盛んであることが日本語の特徴である。そういう複合動詞のあと要素のほうには、多くの動詞連用形に接する、やや接尾辞的になっているものもかなりある。そういう性質の複合動詞に関する研究として、姫野昌子の、

複合動詞「〜こむ」および内部移動を表わす複合動詞類 (東京外国語大学外国語学部附属日本語学校『日本語学校論集』5、昭53・3)

複合動詞「〜かかると」と「〜かける」(同右6、昭54・3)がある。動詞の連用形に「〜こむ」「〜こめる」「〜いれる」「〜かかる」「〜かける」などが結合して盛んに複合動詞が形成される。このような複合動詞の後項について、結合する動詞の範囲、構文論的な性質、意味やニュアンスなどについて、多くの語例をあげ、文例を使って記述している。これらは、同氏の

複合動詞「〜つく」と「〜つける」(『日本語学校論集』2、昭50・2)

複合動詞・「〜あがる」「〜あげる」および下降を表す複合動詞類(同右3、昭51・3、前回のこの欄に紹介されている)

複合動詞「〜でる」と「〜だす」(同右4、昭52・3)

の一連の発表に続くもので、標題からすぐわかるように、いわゆる対応する自動詞と他動詞に類する要素をベアにして取り上げている。日本語教育のためという動機から出ているだけに、現代語の実状に即した記述になっている。

語構成や語源の研究に利用価値の高い、語形のおわりのほうから五十音排列をした語彙表が二種類刊行された。田島毓堂・丹羽一弥共編『日本語尾音索引—現代語篇—』(笠間索引叢刊65、昭53・9)は、『岩波国語辞典(第二版)』の見出し語をさかさつづりにしたものの五十音順索引である。風間力三編『綴字逆順排列語構成による大言海分類語彙』(富山房、昭54・6)は、『大言海』を底本とし、綴字逆順排列のほかに語構成による分類原則をも導入した語彙表である。まず品詞で大別され、さらに語種などに分けられ、具体的な語構成のあと要素を共有するものが並ぶ。たとえば名詞の和語の「い」の中には「寝、長寝、朝寝、安寝……」などが並んでいる。(この二書の宮島達夫氏による紹介が『国語学』118にある)

この期に新たに刊行された国語辞典として、金田一春彦・池田弥三郎編『学研国語大辞典』(学習研究社、昭53・4)がある。大部分の語に典拠の明記された用例があることとともに、見出し語をあと要素とする合成語の語例が並べられていて、語構成が重視されていることもその特色である。

漢語の語構成については、和語を中心とする日本語本来の語構成とは別に考えるべきところも多い。また、現代語と明治初期とでも漢語の語構成の特性は変質してきているとみられる。鈴木英夫「幕末明治期における新漢語の造語法—『経国美談』を中心として—」(『国語と国文学』55—5、昭53・5)はこの問題に関係の深い論文であ

る。「経国美談」の中で当時にできた新漢語と認定されるものをつりあげ、ある漢字形態素がどういう位置で他の漢字形態素と結びついてできているかという点から分析している。たとえば「險河、險山、險城……」のように「けわしい」という意の「險」はかなりの造語力があった。ところが現代語ではそれは衰え、「危険、保険……」のように「あぶない」の意の「—険」は生きているというような例が多数示されている。現代語と違って、幕末明治期には漢字一字にあたる要素がさかんに造語力を発揮したことを、この論文は明快に示している。

慣用句と呼ばれるたぐいは、意味の上で単語に近いような一単位的な性格をもち、語彙を構成する単位の一類として考えるべきでありながら、理論的・体系的な扱いは複合語や派生語以上にやりにくい面があった。高木一彦「慣用句研究のために」(『教育国語』38、昭49・8)は本格的な研究への展望をのべて新生面をひらいたが、その一つの発展が「慣用句の文法的な特徴——テンスの制限——」(言語学研究会編『言語の研究』、昭54・10)として示された。動詞型慣用句(名詞と動詞とのくみあわせという外形をとっている慣用句)が、普通の動詞がもっている機能と比べて、どんな制限を受けているかを調査したものである。「手をかける(かけた)」のようにテンスをもつものは、「手をかけよう、かけろ、かけている、手がかかる」など他の文法的な機能ももつものがある。ところが「身にあまる」のようにテンスを欠くものは、他の機能もみな欠いている、という結果などが示された。テンスをもたない動詞型慣用句は、連用修飾(目を皿にして)、連体修飾(右に出る)、陳述的な成分(なにはさておき)、述語機能(論をまたない)、独立語文相当(今にみ

る)などの単一の機能に固定されていることが示されている。

三、特定の品詞にかかわるもの

特定の品詞を対象とする研究は、文法のほうがとりあげる優先権をもつものが多いと思われるが、語彙論的な面をもつものもあり、また文法論と語彙論の不可分のところもあるもので、部分的ながら、文法との重複をおそれずとりあげたい。

動詞については、一節でみたように、意味分析がもっとも進んでおり、この期にも多く取り上げられた。自動詞と他動詞の問題については、島田昌彦『国語における自動詞と他動詞』(明治書院、昭54・4)が出て、このテーマに関する専門の大きい研究書をはじめもつことになった。本居春庭の『詞の通路』の所説が見直され大きく再評価されているが、おもな内容については文法の項にゆずりたい。第三部には△『当用漢字音訓表』の「自他」▽と題して、著者がかつて文化庁国語課で国語審議会の仕事に関与された関係もあって、新音訓表の動詞の訓一〇四〇を、自他の観点から整理した表が収められている。

小山敦子「同根派生動詞の造語法則——自発態の諸動詞——」(『中田祝功記念国語学論集』、昭54・2)も、いわゆる自動詞と他動詞の対応の現象に関して、「自発動詞」が語根に「ユ」「ル」などの造語因子を付けて造語される法則などを示されたものである。西尾寅弥「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」(『国語と国文学』55—5、昭53・5)は「かける」と「かかる」の意味用法の対応・不対応をしらべ、不対応の部分についての意味の展開のみちすじを考えたものである。須賀一好「併存する自動詞・他動詞の意味」

(国語学会昭和54年秋季大会の研究発表。筆者は出席できなかった)ので、『国語学』120に収録された同名の論文による)は、「モル／モレル」「ドケル／ドカス」のように自他が対応せず、自動詞あるいは他動詞の併存する例を広く集め、形と意味をくわしく検討して、一般傾向を求めている。

次に、副詞にかかわる研究がわりあい目立つと思われる。国語学会の昭和五三年春季大会(東京女子大学)での渡辺実氏の講演「意義の領域をめぐって」では、「対象の側に属する意味領域」だけでなく「言語主体の側に属する意味領域」の研究も開拓しようとする提唱が陳述的な副詞などを中心に行なわれた。(その具体化の一例とみられるものが、次の期に入るが『言語』9-2ハ昭55・2Vの「見越しの評価『せっかく』をめぐって——国語学から言語学へ——」として発表されている)同じ大会での研究発表に、工藤浩『注釈の副詞』をめぐって)があって、「注釈の副詞」を叙述内容とのかかわりかたなどから四類に分ける案が示された。程度副詞については、方言研究にも入るものであるが、茂田恵「大阪府豊能郡能勢町地黄方言の程度副詞語彙——『数量程度をあらわすもの』を中心にして——」(広島大『国文学攷』83、昭54・12)があって、標題のグループに入る語の間の弁別の特徴を求めている。石神照雄「時間に関する程度性副詞V『マダ』と『モウ』——△副成分V設定の一試論——」(東北大『国語学研究』18、昭53・12)は構文論的な研究であると同時に、渡辺氏の言われる主体的な意味領域とのかかわりも深いようである。

日本語教育において、副詞の中に導入や定着のむずかしい語が多くある。この問題について、河原崎幹夫氏が「副詞の導入の具体的

研究」を『日本語学校論集』の2号(昭50・2)から連載しておられる。「さすがに」「せっかく、付わざわざ」「なにしろ・とにかく」ともかく)が取り上げられたが、この期には「つい・うっかり」(5号、昭53・3)「ふと」(6号、昭54・3)がある。

情態副詞については、公刊はタッチの差で次の期に入ったが、鈴木泰「情態副詞の性質についての小見」(山形大学紀要八人文科学V)9-3、昭55・1)がある。情態副詞を形容詞・形容動詞、程度副詞との対比において、意味的に構文的に考察している。

鈴木氏の論文でも擬音・擬態語的なものが考察の中で大きい比重を占めているが、情態副詞の中で独得の大きいグループをなす音象徴語に関して、いくつかの方面からの研究があった。擬声語・擬態語が「——」「——と」「——する」「——とする」「——に」「——だ」のような形をとって文中で語として働く様相を分析して、擬音語と擬態語の弁別や擬態語内部の類別を考えようとした、宮地裕「擬音語・擬態語の形態論小考」(『国語学』115、昭53・12)は、この語類の考察に新しい展開を示すものである。

中野洋「擬声語・擬態語のイメージ——意味微分法による分析——」(『計量国語学』11-7、昭43・12)「同上(続)」(同上11-8、昭44・3)はいわゆるSD法を使った研究である。SD法で測定される「意味」は言語研究としては補助的にしか活用できまいと思われるが、音象徴語には比較的向いているのではないかと期待される。この研究では音象徴語六二語にそれらと意味的な関連をもつ名詞や動詞一四語を加えて計七六の刺激語について三十対の尺度で高校生の反応を求めた結果を因子分析している。第一因子を「印象のよしあし」、第二因子を「巨大性」と解釈し、両者のくみあわせで刺激語

を分類して、かなりうまい結果が得られたとみている。「カタン／ガタン」「ポタツ／ボタツ」のような対において、濁音のほうが印象が悪く、巨大性が大になる傾向がはっきり出ている。

日本語のオノマトペを他の言語と対照させてその特性をとらえることも興味のある課題であるが、玉村文郎「日本語と中国語における音象徴語」(『大谷女子大国文』9、昭54・3)は、標題からわかるように、そのような対照語彙論のための試論的な概観とみられる。日中語の双方の音象徴語の数や意味・形態を大観し、中国語が擬音語指向であるのに対して、日本語が擬態語指向であることなどを結びとしている。

音象徴語の使用面からの考察に、中曾根仁「児童の作文にみる擬声語・擬態語の実態調査」(『作文と教育』30-4、昭54・4)がある。小学校一、二年生の作文と詩から得た異なり四六一語について、形態・音・頻度などから分析している。

語彙の研究の基本段階として個々の語の用例や的確な記述が必要であることは、音象徴語についても例外ではない。というより、音象徴語は普通の文章語や国語辞典から多くの用例を得がたい傾向があるだけに、基礎的資料の必要は一般の語の場合よりさらに大きい。そういう意味で、浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』(角川小辞典12、昭53・4)が刊行されたことは価値の大きいことである。

昭和四九年に出た天沼寧氏の同名の辞典に合わせて、音象徴語について二冊の特殊辞典を利用しうることになった。はじめに金田一春彦氏による「擬音語・擬態語概説」があり、辞典の部分は各見出し語に対して「意味」「例文」があり、ほかに「参考」「同類語」「類義語」などの項目も多く添えられている。用例は、実例をもとにし

た作例が多いが、必要に応じてなまの実例もあげている。

品詞別の語彙構成の比率についての一つの資料が発表されている。『日本国語大辞典』(小学館)の見出し語という、膨大な集団について実数を明示した一覧表である。同大辞典の編集の中心であった松井栄一氏によるものである。(尚学図書『国語展望』増、昭54・9)十一品詞に語素、接頭語、枕詞などを加えて分類した語数が各行別にも示されている。固有名詞を除いた、古語・現代語約三十七万語においては、名詞が九割にも近いことがわかる。

四、語種

語彙を語種別にみてそれぞれの比率を比較することは、従来いろいろな方面で行なわれてきたが、この期にもいくつかの研究があった。語種は本来歴史的な観点からの類別であるが、それぞれの語種が大きいグループとしての性格も保っているのが、現代語の観察にも巨視的には有効な面があるといえよう。

まず、野村雅昭・柳瀬智子「児童読物の語彙構造」(『計量国語学』12-2、昭54・9)の中の語種構成に関する結果としては、児童読物は全体的に和語が多く、低学年ほどその傾向が強くて、やはり現代日本語の基本語彙において和語が重要な部分を占めていることを示すものだろうと解釈されている。

和語が現代の語彙においても、もっとも核心的な層であろうということはいろいろな面から認められる。先年、渡部昇一氏は『日本語のこころ』(講談社現代新書、昭49・10)で「魂のふるさと」としての「大和言葉」を説き、純粹の和語から成る和歌や俳句のほうに深い

感動をおこすものが多いと主張した。この意見をも引用した研究に、佐伯哲夫「現代俳句の語種」(関西大『国文学』56、昭53・12)がある。現代の代表的な一千句を標本として調べ、和語の使用率が散文に比べてきわめて高いこと、また漢語や外来語をまったく含まない純和語俳句は芭蕉時代に比べるとはるかに減っていること、それは一般語における漢語外来語の増大という時代的変容に應じるものであろうことを述べている。また、原忠彦「歌謡曲における漢字音語と外来語」(『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』31、昭53・11)も渡部昇一の意見を検討しつつ、調査結果を述べている。

もう一つ、明治初期の資料について、会話文の話し別語種構成を調べて比較した研究がある。飛田良文「明治初期東京人の階層と語種との関係——『安愚楽鍋』を中心として——」(国立国語研究所報告62『研究報告集』1、昭53・3)であって、人物別に使用語彙の語種を調べた結果、異なり語数における和語と漢語の比率が身分・職業・性別と密接な関係があることを示している。たとえば士階層のほうが商階層より漢語の比率が高いというように。

それぞれの語種に属する語彙グループの研究には、まず漢語について、池上禎造「漢語研究の課題」(『南山国文論集』3、昭53・12)がある。佐藤喜代治『日本の漢語』(角川小辞典28、昭54・10)は、くわしい「漢語概説」に続いて、古代・中世・近世・近代の各期についてそれぞれ概説と漢語の具体例についての解説がある。小辞典シリーズの一冊という形式ではあるが、山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(昭15)以後の、著者をはじめ諸家による漢語研究の進歩を反映する漢語の概説書である。中沢希男『漢字・漢語概説』(教育出版、昭53・2)は基礎的知識を幅広く系統的に解説し

たものである。鈴木修治『漢語と日本人』(みすず書房、昭53・9)は「『的』の文化」「外来語としての中国語」「禅文化にまつわる漢語」のような九つの文章をまとめたものである。

荒川清秀「中国語と漢語——文化庁『中国語と対応する漢語』の評をかねて——」(『愛知大学文学論叢』62、昭54・7)は日中同形語についての基本的な、また具体的な論考である。日中語の対照的研究に属するもので、実際面では中国人留学生の日本語学習に関係する。やはり一般向けの文章の集められた文化庁編集の『和語漢語』(ことば)シリーズ8、昭53・6)もある。

外来語については、『言語』の昭和五三年二月に特集された「外来語の研究」の諸論文がある。外来語の辞典には新しい特色もあった、吉沢典男・石綿敏雄『外来語の語源』(角川小辞典26、昭54・6)と吉沢典男『図解外来語辞典』(角川小辞典27、昭54・10)とが刊行された。

五、計量語彙論

計量言語学の方法を使った語彙論的な研究として、水谷静夫氏の、林(知己夫)の数量化理論第Ⅲ巻を使った研究がある。以前から続けられている昭和初年の流行歌を対象とする「昭和前期流行歌と相の語」(『国語学』115、昭53・12)は、心情表現とかかわりの深い形容詞(相の語)二四の、同一の歌詞の中での共出現(co-occurrence)の状況を基本データとする分析である。「昭和初期流行歌での語の度数分布 昭和初期流行歌の調査から2」(『計量国語学』11—5、昭53・6)は、『計量国語学』72の論文に続くもので、流行歌という短い作品の語彙の量的構造を対象としている。また、「梅か桜か

分かねども——古今集梅・桜の歌の、数量化第三類による分析」(『東京女子大学日本文学』51、昭54・3)およびその続稿「用語による梅・桜の歌の弁別」(『計量国語学』12-1、昭54・6)は少数のキーワードの出現、不出現の状況からの弁別の成功した結果をのべ、またそれをもとの歌にもどして吟味している。

芳賀純、サトー・アメリカ・ルイサ、萩原裕子「一言語使用者の2言語連想について」(『計量国語学』12-3、昭54・12)は、日本人大学生を被験者とし、「教育を受けた」および「educated」に対する連想語を求めて、両方の結果を比較したものである。

大城宜武「チェック・リスト法による語意味の分析——計量意味論からの接近——」(『計量国語学』11-8、昭54・3)は、十の動詞(終止形と連用形)から成る刺激語について、六十語の形容詞のリストにチェックを求めた結果を原データとする研究である。

六、現代語彙の成立過程など

現代日本語の語彙に大きい影響を与えている、西欧語からの訳語の研究に関しては、蘭学以後の江戸期と明治時代の全般にかかわる考察として、飛田良文「訳語研究の視点」(『国語学』115、昭53・12)がある。進藤咲子「福沢諭吉研究ノート(2)」(『東京女子大学論集』29-1、昭53・9)があり、筆者はまだ見る機会を得ていないが、同氏の「ことばの生存競争——明治初期の文化語をめぐって——」(『言語生活』35、昭54・11)にも論吉について言及されている。佐藤亨「訳語『病院』の成立——その成立と定着過程——」(『国語学』118、昭54・9)はオランダ語「ガストホイス」の訳語として成立した「病院」が明治期に一般化していった経過を記述している。

訳語研究の資料としては、飛田良文編『哲学字彙 訳語総索引』(『笠間索引叢刊』72、昭54・10)が刊行された。初版本の原寸大写真も本文として収められていて、文化的な用語の成立を調べる上の重要資料の利用が容易になった。

同一の文章に対する訳語の年代的な変化をとおして、近代日本語の変化をくわしくしらべた研究として、宮島達夫『共産党宣言』の訳語」(『言語の研究』、昭54・10、むぎ書房)がある。共産党宣言がはじめて日本語訳された一九〇四年(明治三七)から、現在までに出了た二三種類の異なった訳文を比較することによって、現代語に至る語彙面の変化を精細に調査している。用語が現代語に近くなった程度からみて、語彙の変化の大きかったのは、一九二〇年を境として文語文が口語文に変わった時期、第二次大戦の前後を分ける時期で、どちらの変化期にも難しい漢語が整理された。訳語の統一、日本語の意味体系の国際化、社会科学用語の統一などの傾向が、多面的な分析によって指摘されている。

この展望号についての編集委員会の方針は「現代は明治以降とす」となっており、訳語の研究も江戸期に関しては分担範囲外になる。いわんや、宮地敦子『身心語彙の史的研究』(明治書院、昭54・11)に言及することは傾空侵犯になるが、現代語における語の歴史的な背景を知る上でも参考になることが多いという意味でふれた。類義語のグループのはかに、反義語、対義語、対比語のような意味関係を追及した論文が比較的多く、この方面は従来の研究が乏しいのでその点でも意味が大きい。十年あまりの諸論文をまとめられたもので、「身」(身体と空間に関する語彙の変遷)と「心」(愛と美に関する語彙の変遷)という大きな二部に構成されている。

これも現代語の語彙論からは大きくはみ出すけれども、上村幸雄「史的語彙論のための序説」(言語学研究会編『言語の研究』、昭54・10)は史的語彙研究の新しい壮大な展望を述べたものとして注目される。語彙体系はその言語社会の文化の発展に応じて発展すると明言し、人類の歴史の視野に立って語彙史を理解しようとしている。日本語の語彙の発展にはその独自の様相の中に諸言語に共通な発展法則が認められるという見通しに立っている。文字通り「序説」であるが、多義語における多義性のありかたの例にあげられている「たかい」の音のピッチについての意味の派生について、上村氏のもっとも専門とされる音声学の面からの説明などもみられる。

七、その他 (語彙研究全般も含む)

語彙研究の今日までの歩みを代表するような論文を集めた、川本茂雄・国広哲弥・林大編『日本の言語学第五巻 意味・語彙』(大修館書店、昭54・1)が刊行された。同じシリーズの文法の巻に比べてみると、明治期の論文が一つもないこと、昭和四十年代のものがいちばん多いことがわかり、この面の研究の歴史が非常に浅いことを語っているようだ。服部四郎氏の意義素説の成立や、これを継承・発展させている国広哲弥氏の研究を中心にして、意味関係のものが多く集められている。

語彙研究をもっぱらの対象とし、その全般を扱った独立の著書として田中章夫『国語語彙論』(明治書院、昭53・2)が出たことも逸することができない。語彙調査などの計量語彙論的な面に重点がある。てぎわよくまとめられており、また各種の調査結果などが多く引用されていて便利でもある。(寿岳章子氏による紹介が『国語

学』117にある)

見坊蒙紀「ことばのくずかこ」(筑摩書房、昭54・8)の刊行はあまりにも広く知られているが、長年の膨大な採集資料の粹を集めている。一つの方法によることばの生態観察であり、とりわけ語彙の体系の不安定な流動的な面に対する、非常に貴重な資料の提供であると思われる。

以上二年間における現代日本語の語彙に対する研究情況の展望を試みた。語彙の組織的な研究はまだ歴史が浅く、今後どのように進展し充実していくかは予測することがむずかしい。しかし、実証的な内容をつみあげていく着実な研究が多く行なわれていて、理論倒れになるようなことなく、地道な発展がなされつつあると言ってもまちがいはないと思われる。

研究内容に対する理解の不足や、重要な研究の見落としなども多いことが懸念されるが、お許しをいただきたい。

(文献の検索などでお世話になった国立国語研究所の文献室、図書館、および所員のかたがたにお礼申し上げます)

——群馬大学教授——